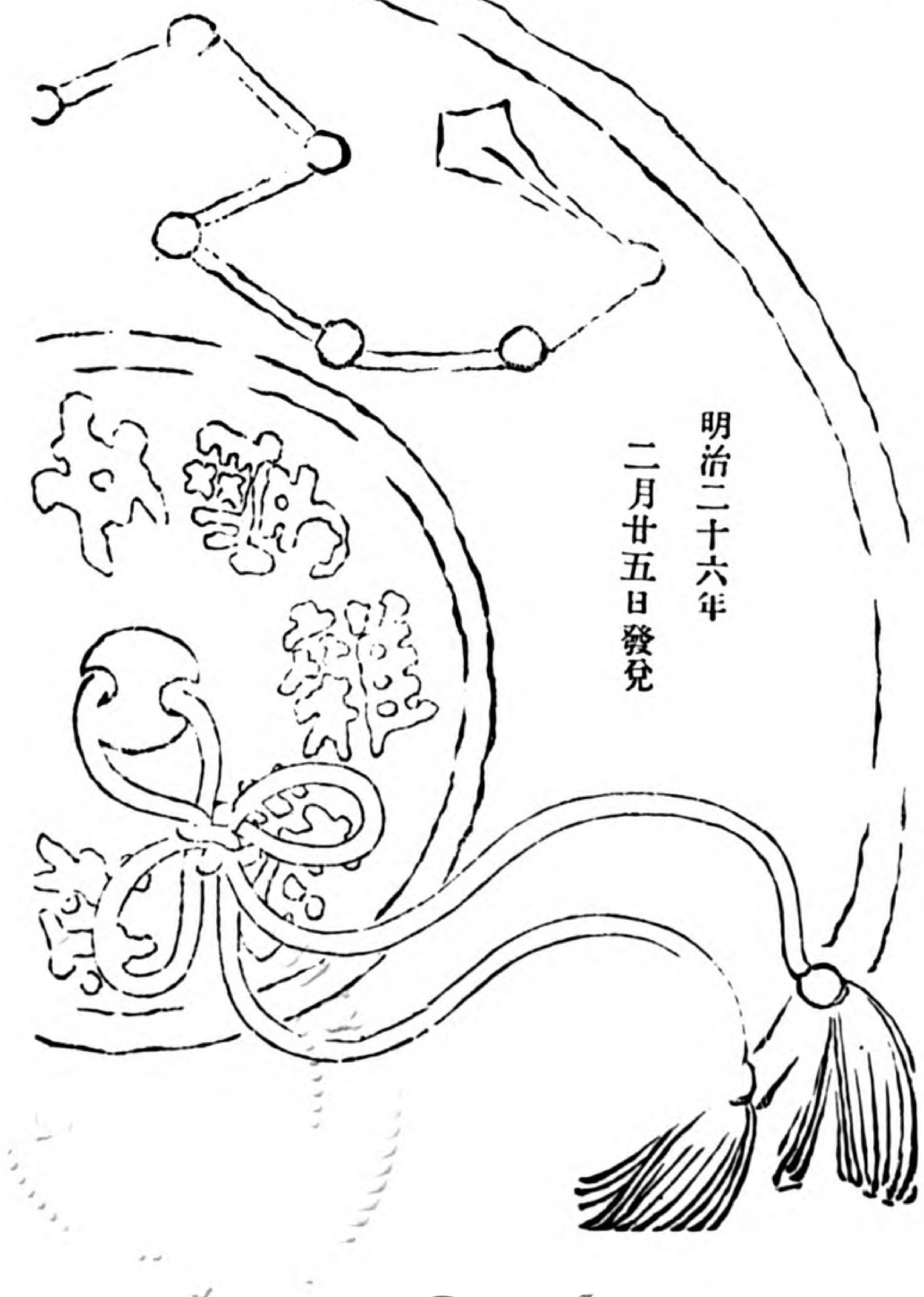
Feb. 1893
No. 339-1

女學雜誌

第三百三拾九號
甲の卷



明治二十六年
二月廿五日發兌

注意

●社説　國事は政事○時勢論○改革の辨○教界新現象○我國尙如斯（井上哲二郎氏）

●小説　蛇物語（花圃女史）

●雜錄　草庵の澁茶（暗光廬主）○井上大人の野邊おくりのかへるさによめる　殘花　○山庵雜記（透谷子）○沖の嵐（紫苑山人）

●史傳　アブラハム（土井久壽彦）

●摘要　獨逸國に於ける軍制並に社會改良

●批評　武道秘訣合氣の術○詩篇若葉（透谷子）○文祿の役に於ける小西行長○潛庵先生○大磯海水浴場の恩人

●時事　名士政談錄（大隈伯、安部井磐根、犬養毅、白根專一、尾崎行雄、佐々友房の諸氏）○植民協會○後藤昌直氏布哇行

●片々

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 339. February 25th. 1893.

EDITORIAL:—Politics do not cover All that Concerns a Nation. The Signs of the Times. What is Reform? A New Phenomenon is the Christian Church. What Mr. Tetsujirō Inoue Writes about the Christianity in Japan.

NOVEL:—"Kuchinawa Monogatari." (Kwaho.)

MISCELLANEOUS:—A Cup of Tea at the Recruits Mountain Home. After Coming Home from Mr Inoue's Funeral. Journal of a Mountain Home. Storm of the Coach.

BIOGRAPHY:—Abraham.

FRAGMENTS:—Germany's Military Law and Social Reform.

本號(第三百三拾九號)目次

●社説　國事は政事○時勢論○改革の辨○教界新現象○我國尙如斯（井上哲二郎氏）

●小説　蛇物語（花圃女史）

●雜錄　草庵の淸茶（暗光庵主）○井上大人の野邊おくりのかへるさによめる（殘花）○山庵雜記（透谷子）○沖の嵐（紫苑山人）

●史傳　アブラハム（土井久壽彥）

●摘要　獨逸國に於ける軍制並に社會改良

●批評　武道秘訣合氣之術○詩篇若葉（透谷子）○文祿の役に於ける小西行長○潜庵先生○大磯海水浴場の恩人

●時事　名士政談錄（大隈伯、安部井盤根、犬養毅、白根專一、尾崎行雄、佐々友房、の諸氏）○植民協會○後藤昌直氏布哇行

●片々

前週(第三百卅八號)赤表

○社説　歳費の十分一○家族の會話○海外渡航婦女取締條例

○史傳　小公子著者バーネット夫人の傳○バットラー氏夫妻（其履歴動）

○家政　家事小言數則（ふみ子）○田家のこよみ（畜鵆子）○今昔物語○針錢○結婚のゆびわ○ウエスト女史の筆の跡「新日本」

○兒監　ひろひ兒（上）しづ子

○摘要　合衆國が拂ふ酒類の價幾干○女哲學者

○女報　數十件

○孤兒の友　愛岐震災自助會

前々週(第三百卅八號)白表

○社説　當世治安術○當今基督敎會の失策

○小説　ローレンス（第一回の下）（若松賤子譯）

○開書　英人某に與ふるの書（櫻井明石）

○雜錄　御坂嶺の富士山（山月子）○閑窓茶話（脫蟬子）○海石榴舍歌話　第一）井上通泰記（野矢當方の事）○詩人、詩人、（紫苑山人）

○史傳　アブラハム（土井久壽彥）

○批評　大和田氏の和文學史○嵐の糸目○小説花相撲○新敎育

○片々　拾數件

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第三百卅九號　明治二十六年二月廿五日發兌

社説

國事及び政事

人は、國事と政事との別を辨まえずんばある可らず。政事は、國事の一なれども、而も其の全體にはあらず。國事なる者は、廣し、且つ大ひなり。安くんぞ區々たる政事一類の事を以て其全領を悉せりとすべけん。

人の爲す行にして、單に一身に關わるものと、更に一家に關わるものと、邦國、五世界に關わるものとの別あり。もとより、仔細に因縁を論究せば、一葉の落るは千秋と關わり、杜鵑の鳴くは、天下の亡ぶると因みすることもあるべし。然れど、今は斯る哲學的の推究を省き、概して、人々の行爲に、以上三種の別ありとは云はん。

而して、三種の行爲中、邦國及び五世界に關するの事を以て國事とは云ふなり。人生れて既に父母の鄕にあり、長じては一國の市民となり、廣く五世界同胞の中に生息す、安くんぞ一身一家の事のみに局促して、開眼擴胸の樂しみを廢することを得可けん。國事なる者は、是れ、人の爲さゞることを得ざる所のもの、亦其の爲さゞる可らざる所のものとす。國事を懐ひ、若くは、其懐ひを實行することを爲ざる所の人は、片環なり、全人にはあらず、其心病めり、健全の質を有せざるものなり。今人、屢ば、個人主義、國家主義と云ふ。然れど、個人には既に國家の觀念天生す、特さらに異物の如くして新たる之を加ふることを要せざるなり。但だ夫れ念ひを一身一家の私に限り、絶えて邦國五世界の事を達觀することをせざる輩は、此の天生の種ありと雖ども遂に芽を發し、苗を抽くことあらず。凡俗の族大率ね國事に冷やかなるは、單だ之が爲のみ。

故に、人は國事を懐わざる可らず、懐ふて之を實行せざる可らず、之を實行するの方途を考ふるに當りては、審らかに國事と政事との別を辨識せざる可らず。政事を以て、國事中の重要なるものとなすは、淺見なり。政事を以て國事中の第一の事となすは、迂なり。政事と國事とを混淆するに至ては、愚の極み也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

人は、政事の眞價値を知る乎。政事の價値そも〳〵何程ぞ。吾黨は之に過多の價ひを附する妄執の迷者を見て、坐らに憫思に堪へず。痛ましき哉、世の人。封建の遺傳に慣れて、政事これ万能功ありと誤まり認ため、又、未開時代の歴史に眩惑して、政事家これ第一流の人物なりと虚しく賛す。歎ずべき哉、當世の流行や。虚榮と、愚と、相ひ手を交へて、人を抱き、人をして、徒らに政事の臺上にのみ踏舞せしめんとはなす。彼の胸に一卷の洋書を暗んぜず、口に誤謬多き英語を辛くして談ずる所云る貴婦人等が鹿鳴館にヲドルや、識者爪弾きして其愚を笑へり。左れど、胸中何等の大經綸あるにあらず、身に撥亂改善の敏腕あるにあらず、至誠止むことを得ずして立てるにもあらず、十年攻學練磨の識見なくして、半生たゞ「政事家」の名に浮れ戀ふる、當世蠢々たるポリチシャンの面々が政事界にヲドリ騒ぐを見るとき、識者が苦笑して、之も亦た一種の舞踏なりと言ふは、實に妥當の評なりとす。

但し、政事は面白きものに相違なし。其舞臺の上に演ずるは、役者たる人の身にとり、面目且つ愉快の事なるべしとは敢て想像しがたきほどの事にはあらず。左れど、此役者は、他に人ありて作りたる筋書に據り、目前に見物する看客の評判に制せられ、一々相方の仕打に掛念し相應し、歩むにも拍子の音に協はせ、首を掉るにも、ハヤシの調子に乘り、或時は、涙なきに泣かざる可らず、或時は可笑しきに忿怒せざる可らず、殿樣となりてエラ相に振舞ふも只時の間にて、舞臺一轉すれば依然たる木阿彌とならざる可らず、又は、役割の都合にて下司下郎となり、足下に踏まれて戰々畏縮するの躰をも裝はざる可らず。惣て是れ、芝居の役者に要する所にして、亦た政治の役者に均しく要むる所ろたり。此如くすれば、此般の役者は、畢竟他に役せらるゝものなり、眞に役者と言はざる可らず。而して、役者の眞相は木偶となるにあり。木偶子、黒頭巾に繰どらるると何程の懸隔ぞ。

夫れ、立憲政治となりてより、政治家の價ひ下落したり。今后ます〳〵下落せんとす。方今の世は、政事家、人民を啓導すると少れにして、人民、政事家を案内すると多し。今后、ます〳〵然らん。此時に當りて、今ごろより、そろ〳〵政治家と云ふことを有がたがり、人々相率ひて、此高尚にもあら

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ぬ政治家とのみ爲らんと欲するは、何の恐ぞ。

人世の最大事は、人を善くするにあり。人を善くする方術の最良事は、其心を善くするにあり、而して、人の心を善くする手段の、尤とも堅固なる、尤とも直接なる道は、傳道と敎育とにある也。故に、何れの時代、何れの邦家を問はず、苟しくも此の二大事を欠きて、單に表面外薄の事にのみ局促し以て眞正の文化を遂了せし者未だ曾てあらざる也。而して、傳道と敎育とは、大ひに經濟上の事と關渉す。經濟の秘義や深奧なり、其關する所ろ頗ぶる廣し、經濟は單に富を造るの道にあらず、亦た人を造るの道なり。故に、殖産、興業、勤勉、儉節等もろ〱の經濟上の德は、大抵、傳道及敎育上の諸德と相ひ連接す。左れば、經濟の道を正ふして、之に其眞の天職を達せしむるは、人生最大事の一とす。近年、外國に於て敎會内より、經濟の講義を聞くもの多きは、吉兆と云ふべし。

傳道、敎育、經濟は、人世の三大事なり。之を、德、智、力の三に配して、完人を造り、又完人、事を行ふが爲めの緊要なる事務とす。

而して、政治なる者は、此等三大事の進退に隨がひて、進退す。之に先だちて進退すると亦ありと雖ども、其度や太はだ少なし。故に、政治家なるものは、卒先者にあらずして、伴隨者のみ、作者にあらずして役者のみ。之に要すべき、達觀達識とは、士民の智德力の進歩の度幾干なりやを觀識するにあり、其進歩の度に於て國民惣躰の上より所望する必要物の何なりやを察知するにあり。之に必らずしも、百年の大計あるを要せず、近く二三年間に對する鋭敏なる識見あるを求むる耳。

吾黨豈に政治家を輕んずるものならんや、方今流行するが如き政治家には感服せざると固より論なし、彼の眞誠政治家なるもの丶資格に對しては、只ならぬ同情の念ひなきにあらず。玆に烈告せんとする所ろの一事は、政事を以て唯一の國事なりとするの誤謬を辨ぜんと欲するにある耳。

ステーツメン、譯して國士と云ふは可し。左れど、國士なるものは、決して政治家のみにはあらざる也。心衷不斷、國事を忘れず、識見つねに公共万衆の上に係り、一身一家を擲うつて、邦國五世界の爲に献ずるの決意小止みなく胸中に往來

するの士は皆な國士なり。或ひは、傳道師となり、或は敎育者となり、或は經濟家となる、其事はこれ政治にあらずと雖ども、惣べて皆な國事の最大なるもの也。之を、榮身盛家の私の爲にせず、六合天地、宇內億兆の上に關するの識見を以て堂々として處理す。快なる哉、壯なる哉、如此き士。此士や是れ眞の國士なり。

左れど、吾黨は、人の靈の爲めに、大小を謂わず、社會に影響すべき世の事務の上より大小を云へり。誤解する勿れ、傳道も、敎育も、經濟も、政治も、各自達德の人個々にその職を稟くるに於ては、皆な其人に於ての最大事なり。安くんぞ彼此を較べて、大小を評すべけん。吾黨が、此篇に烈告する所のものは、唯一事のみ、云く、政治を以て唯一もしくは、專要の國事となすと勿れ、と。

時勢論

大詔煥發してより此の方、政界の局面一變したり。喩えば、雪、天より下りて、地上頓に白皚々たるが如く、暗夜電光一と度び點じて、緑樹惣べて新景を呈するが如し。吏、民、互ひに和協せんとし、上、下、もろともに神洲を贊美す。是れ、偏へに、瑞穗の國特有の美所あればなり。

詔に云く、

國家軍防の事に至ては、苟も一日を緩くする時は、或は百年の悔を遺さん、朕玆に內廷の費を省き、六年の間每歲三十万圓を下付す

と。棒讀して、此に至る、臣民孰れか感泣せざる。

伊藤惣理大臣、則はち公けに宣言し、明らかに議場に於て盟つて云く、第五議會到來の日迄に、必らず政紀を整ふべし、特に海軍省の如きは、大ひに革正すべしと。斯に於てか、衆議院も亦た豫算を再查し、且つ軍艦製造の案を復活せしめたり。

大凡そ、積弊鬱結し、百紀緩み、正に大革新を要するの時に當ては、何如なる傑人と雖ども、勢に乘じて猛斷するの外ある可らず。如此き時に際しては、傑人は只だ一器具のみ、只だ純乎たる器具として大勢の命を謹んで承わり、有の儘に其指ざす所に趣むくに在る耳。

伊藤伯の聰慧なる、何んぞ革新の要と其途とを知らざるとか

あらん、知つて而して斷ずる能はざる所のものは、之に文事的一斷を添ゆるの力なきを憂ひてなり。内閣に、武斷的の人はあり、左れど之と共に與にするは彼の智に於て爲し能はざる所ろなり。彼は遂に議會の勢力を假らんとせり。彼は實に議會の强抗論を惡くむものにあらざるべし、あゝ、彼に取ては、眞とに善き方を擇みたり。

議員は亦た黨議と院外蹶起連との爲めに支配せらる。而して黨議と蹶起連とは、茅屋の内に安住せる村民等の意向に伴隨するもの多し。

吾黨甞て議院の受付室に到る、淺黃色五つ紋の木綿羽織を着し、丈低く色黑くして、風采の素野なる人數多あるを見り。曰く、是れ議員撰出地方の田舍人なりと。而して、多くの議員が此等田舍人に會見するの躰裁極めて慇懃、寧しろ其鄭重の阿諛に陷いるを奇しみたり。

更に、入ッて議場に到れば、此等の議員俄かに昻然、立つて大臣、次官を叱咤する所ろ、一毫の遠慮會釋なし。

此に於てか、大臣次官は、議員よりも優らず、議員は撰出地の土百姓素町人よりも優らず。切言すれば、田舍の土百姓素町人は大臣次官と同等なりとの事實明白となりぬ。斯くして、輿論なるものの勢力いよ〳〵隆大となりぬ。

此故に、方今政治界の革新なるものは、此等最低の輿論に伴隨するに過ぎず。此輿論必らずしも賢なりとせず、左れど政治界に於ては、比較的、之を以て尤とも多く賢なるものとなす。此輿論を愚なりとして、之を善導するは、所云る政治家の能く爲す所ろにあらず。何んとなれば、今の政治家は、此等の輿論によりて撰出せられ、亦此撰出者によりて動かさるべきものなれば也。

左れば、政治家は、暫らく此の輿論に伴隨すべし、此輿論を改良し、此輿論を教育し、以て大勢の方針を一轉せしむるは、他の傳道者、教育者、經濟家の任也。

想ふに、第五議會に於ては、輿論と院外民黨とは、更に彌よ反抗すべし、院内民黨は亦隨つて激烈なるべし、此に於てか内閣との衝突は更に一層甚しかるべし。然れども、此れ必らずしも、伊藤伯等の恐るゝ所にあらざるべし。亦、民間識者の失望する所にもあらざるべし。而して、吾黨が日夜に祈念する所のものは、此爭の單へに立憲的ならんと是のみ。苟

くも、血を流さずんば、方今の衝突又衝突は、寧しろ當然必要の階段として、暫らく耐忍すべきもの也。

改革の辨

ダル井ン曰く、生物は歩々として進化す、顧りみて、進化の跡に所ろ〴〵斷絶のあるあるは、當時躍然飛越せしにはあらず、只だ其途ゆきの滅して今に其跡方を存せざる耳と。夫れ、改革は、進歩の路標のみ。后人、單に路標を見て、偶時、忽然に此事ありしとなす。安くんぞ、知らん、寸、尺を積み、尺、丈を重ね、則はち所々に此の標を立てたる耳なることを。翻つて當時の眞狀を觀れば、皆これ凡人歩々として進み行きたる足跡を印する也。

然りと雖ども、人に改悔あり、邦家の事に亦た一轉翻反して其針路を北より南に變へたるが如きとなしとせんや。蓋し、之れあり。之れ、生物肉躰の進化には無き所ろにして、人類自由なる意思の上には必らず有る處ろなり。然り、人世の事には、眞の改革あり。

但だ、改革や、意思の變向より來る。此故に、同人にして、其意思を一轉すれば、茲に小改革あり。人を變へて、意思なるものを大變せしむれば、則はち茲に大改革あり。到底、苟くも、意思を變へずして、茲に改革なるものあらんや。改革の要、人を變ゆるにありとの眞義は則はち是也。

明治二十六年の伊藤内閣は、明治十八年の伊藤内閣と異なる所のものある乎。更に切言す、伊藤博文氏其人や、今昔に於て、變異せる所のものある乎。有らば則はち可。無しとすれば、則はち之を切要せざるを得ず。其内閣自から一變する乎外より一變せしめらるゝ乎。伊藤伯、自から開化する乎。他より開化せしめらるゝ乎。抑そも亦た異分子を外より入るゝ乎、もしくは異分子の勢力を外より借用する乎。方今政界の革新策なるものは、畢竟、意思を一轉するにある耳。

教界新現象

基督敎會内の新現象は、外國傳道會社と、日本人の役者との、所云る和衷協同追々に破るゝ事。並びに、破れて后ち日本人獨立獨行せんとする氣運の漸やく盛んとなりゆかんとする事。これ也。

抑そも、外國傳道會社は、外國多數の慈善家が義捐金を管理し、之を我日本國の善事に使用するとの處置を爲すもの也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

たとひ、其處置にして、往々當を得ざることありとするも、其志に至りては、深く感佩鳴謝せざる可らず。故に、之と和協を破るが如きことは、望ましきことにあらず。其志を無にするが如きに至ては、更に彌よ不可也。吾黨は、外國傳道會社と快よく和協し、相提携して我日本國の善事の爲に成べく多くの資力と人手とを使用せんことを欲するもの也。

左れば、吾黨は外國傳道會社との和協の破るゝを祝せずして、寧ろ之を悲しむ。然りと雖ども、方今の新現象に對しては、密かに微笑し、叙むろに好景況に向ひゆくことを感謝せずんばあらず。

夫れ、和協なるものは、獨立者に於て爲すことを得べし。彼の獨立獨行することを得ず、只管ら他に委頼するものの能く爲す所ろならんや。此如き體の和協なるものは屬從なり、提携するにあらず、お伴をする也。

吾黨は、日本基督敎會が、外國傳道會社に委頼することの過度なるを慨するや久し。又、基督敎界の有力者が、何事にまれ、外國傳道會社を豫算の内に入れて經綸するの意氣地なきを歎ずるや久し。而して、今や、此の新現象に會す、何んぞ祝せざることあるべき。

須からく、獨立獨行すべし、傳道は黃金を第一に要するものにあらず、ポウロが千里獨步して神洲に三倍するの地方に傳道するや、其第一に賴む所ろのものは資力にあらざりき。單身尙斯の如し、今の日本新敎界内には、實際五六万の信徒あり、其尤物を合すれば、現存せる日本國裏のあらゆる團結よりも、尙ほ多數、多力の人を得べきならずや。

然りと雖ども、吾黨が新現象に祝する所ろのものは、其の獨立的の精神にあり、外國の傳道會社と離るゝと云ふの故にはあらず。外國にせよ、內國にせよ、我日本國の傳道の爲に助力すと云ふものを謝して受けざるの理あらんや。尤とも要とすべきは、助力として受くるにあり、主力として待せざるにあり。助力を擯斥して僅かに勇氣を皷するは、臆病者の爲す所ろ也。外國の人を斥ぞけて、得意たるは、維新前の未開化もの也。

吾黨は、敎會に於ても、亦先づ暫時の衝突に耐忍すべし、一度び霜轟ろき電閃めき、而して后ち快晴の和然たるを見んとを欲す。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

我國尙斯の如し

井上哲次郎氏、諸種の雜誌に投書して、切りに、教育と基督敎との衝突を痛論す。論中に引證したる事實は、過半實際と相違せり。其論辯する所ろの理義は在ふれたる陳腐に屬す。其憂慮する所ろの者は、蓋し杞憂なり。其の外國に於ける基督敎反對者の名を列擧する所ろ、尤とも笑ふべし。然りと雖とも、氏は實とに能く此類反對者の感想と、立論とを代表したり。彼の長文を見て、井上氏一個の意見となすとなかれ。氏は實に多數の同類の意見を代言せり。

嗚呼、國會と云ふ者を開き、外國との交際も餘程熟し、現に井上氏等と共に帝國大學に敎授する信徒も有り、基督敎の傳道を以て立憲政躰に必要なりと説法せられ之に感服して實行せんと試みたる人物理大臣となり、又、基督敎信徒を以て、衆議院の議長たらしめ、衆議院内に最大勢力ある政黨の中に基督敎徒をして尤とも名あらしむるの世の中に於て、今以て基督敎は國家に害ありとの陳腐論を繰返すものあり、而して之に賛成するものあり、之を聞きて喝采するもの多し。今日の日本は、尙ほ此如き日本也。

此時に當りて、基督敎の傳道に戰々兢々とし、其顯正を徒らに掛念し、成るべく温和手段を執り、寧ろ巧みにして舊敎徒の手段に類せんとするが如きものあらば、歎ずべきと也。新酒を盛りては、舊き皮袋の破るゝことあり。破邪は必らずしも要とせず、顯正は尤とも明白、尤とも健全ならずんばある可らず。

小說

蛇物語

（其一）

花園女史

丘の上に築き立たる家のいと高き階上は、としまだ若き畫工の繪畫室なり、室内には主人の心しらひみえて、旅路に得たるめづらしきものなどを置ならべ側には價たふとき裝飾物を配置おもしろうおきなしたり、汚れに光りたる板の間をおほへる熊の皮も、多くは得かたき品なめり、壁に建掛けたるは

巴比倫の武器の類多く中に立まじれるは、うるはしき銅像、くろき大理石の上の圓柱に倚りてたてり、机の上にも種々のものうづたかく成て、鏡の側に見事に成長したる棕櫚、陶器の鉢に挿したる燈心草、いづれも心用ゐたり、色つきし破璃窓をもりて、紫色の織物のまど掛にさえぎられ、半圓形に、室内にさし入る光線、うすぐらけれど、のどけき春の日光は、屋根の上よりみちびかれて、眞中にかゞやきぬ、この眞中にあるは、おほきやかなる一枚の畫の枠張まだとれねど、人の丈其儘にゑかきいでし以色列人の蛇に巻つかれて苦痛になやめる狀、眞の如く、はやかき上げんとする圖なりけり、かの年若き畫工は、其前におよび腰になりて、心から樂しみつゝかきなすにも、終りに近つきしを殊にうれしと、先筆を下におきて、はけをかたへにかけ、躰を伸して余念なくながむるさま、同じ年頃の若者は遊戯にふけり、夢現の堺なくあかしくらすべき月日をあだにせず、我得たる天稟の才をこれに發輝して、業にいそしみ勵むぞいとめづらしき、今一點筆を入れなば、活々と躍りなん斗りの圖の蛇を、側にかねて寫生せんとこの繪の爲に生捕し大蛇の籠に入りたると、見くらべ見合せては、進みて一筆入れ、又退きて、うつゝなく見入れぬ、籠中の蛇はねぶれる如く、横木まうつはりて、動かねど、大きなるうろこは寶石つらねしやうに、すさまじくかゞやきぬ、陰にこもりし冬ははや過行き、小草の緑も色新らしく、木の芽も春の風暖けくなれど、それともしらぬ畫工はたゞ〳〵一意專心こゝに心とられ、籠中の蛇の生けりや、死せりや、をもおもはず、日頃の心ならひにいつもかく動かぬものと心を安んじて、炎はく口も殘忍の氣を帶たるすさまじき光を放つ眼も開くよなしとのみ信ずるやうに成ぬ、思をこらしたる一筆を染めて、余々と退きし畫工は、み自ら批評せんとほどをはかり窻の戸をしめて、筆を煙草に代へ、指にさしはさみくゆらしそめぬ、椅子に身を投げかけて畫のおもてをとみかうみ、二年の辛苦の長かりし事よ、とつぶやきて、左の手に窻かけをもてあそびつゝ、右の手に灰をはたきて、巻煙草を十吸余り一息にすふまゝに、立昇る煙は横にさしくる光線を纏ひて、圖面にかゝれば、霧におほはれ靄に棚曳かれし如く見ゆるが中々にうき出ん斗の趣をそへ、生るにかはらぬ樣に、心滿足りてか、巻煙草持しまゝに、畫を見つめし畫工の眼に

も、いつか立のぼる煙かゝりて、うちかすみ、深く枕の中に頭を引入れぬ。

（其二）

次第〳〵に立のぼる煙は、へやの中をおぼろになし、ひとしくけぶれる日光も、夕ぐれなれば横さまに入日のかゞやくに暖かく成し一間の中には身じろかぬ畵工の眠りに引かへて、此頃のあたゝかさに身にゆるび出來て、けふしもこのさしくる日の光に勢つきし籠中の蛇、かたく卷つきし木の枝をはつかづゝすべり〳〵、わだかまれりしをわれと解くに一枚〳〵かさなりたる鱗はきら〳〵と光を放ち、見る〳〵勢加はりて、除々と動き出でもたげし頭に、みまもすは、二點のかゝやく眼光、金色を帶て、まづかうべより下におろし、鐵網のくま〳〵めぐり〳〵うねり〳〵かつ高く、かつ低く、はひめぐりて、尖がれるかしらにおしにおすに、畵工は常しづかなるになれて、かたくも戶ざゝざりし網戶、音もせで半ひらきぬ、蛇はわたゞしく身をひきて、頭を上げ、しばしうち案ぜしが、又ヌル〳〵とはひ出で、アナヤ、躰の半は籠の外に來ぬるぞおやふき、折しもあれ、足音聞えて、戶をたゝきぬ、おどろかされし畵工は、はじめて目を開らき、室內をみれば日ははやしづみて、室內はくらう成はてぬ、足にあたりのものをよけて立上り、あゆみて戶をおし排けば、一人の小僕さゝやかなる封狀もちて立てり、取あげおしひらきもてる燭によみ卒り、小僕をかへしやりて、われが引つゞき部屋の戶に鍵をおろし、あわたゞしく立去りぬ、今はものゝ響も、人音も聞えず、一足づゝ階を下りる足音も消て、以前の寂莫にかへりし室內には我よと又勢づきし蛇その昔野山をはひめぐりしやうに、全身を引のばして、波のうね〳〵うねり〳〵、戶にのぼらんとしては又たゆたひ、高うひくう、はひめぐれば、風なきに窓かけそよぎ、人なきにあたりのものうごくさま、魔の手のすさびかといとおそろし、はひめぐり、はひまはるうちに長き年月躰を屈せし心地も快復し、活氣を帶たる蛇は、植木の棕梠の躰に觸るゝごとにます〳〵野もせにありし昔を、なつかしく、おもひ出けん、いつ方よりか遁れ出んと首さしのべ、まなざしことにするどくはひめぐしが、道なきにつかれてか、そのまゝそこに動かず成て、室內は又寂莫たり

（未完）

雜錄

草庵の澁茶

暗光盧主

ミューズの神は塵人形の足おとを厭ふてや、宇宙一美の碎片を降して時に浮世の塵塚に化粧せんとするらん、草庵に澁茶を煎じて爐を圍むの二客あり、翁の古びたる手紙を軸物として山家集一編を手ずらしたるを見るも風趣思ふべく、破れ果てし秘藏の舊約聖書と眞覺大師證道歌を放ち難きも奇妙なるに、チヴアイン、コメデーと露伴が對髑髏一册を按撫しつゝ陶然と笑ふものいよ〳〵すねものと極まりたり、或は凄然と笑ひ或は愁然と悲しみ、或は噓然と嘯ふく、笑ふ時笑ふか、哀しむなり、悲む時悲しむか、微笑むなり、圓顱に道服着たる方の客、やがて打談らふを聽けば

窻前一望の此野景に雪は悉く路を埋めて浮世の路を隱たり、斯くの如く浮世に分らぬ路は男女の迷ふ路にこそ、ヘブリユーの歌仙すらも、奇くして識り難き路三つあり否な四つありと嘆じて此男女の路を、鷲の空ゆく路、蛇の磐に這ふ路、舟の海路と列べ數へたり、桐壺の仙女も遠くて近しと量りかねたるは此路ならずや、人世もし塵少なくんば此路は玲瓏たる水晶宮裡の路たらん、憎きは色情の惡魔にこそ、戀の假面を裝ふて凡俗を誑かし、毒魔は終に肉俗の天地に荒れ廻りて生血を汚濁せしむると幾干ぞや、

破れたれども黑紋付きの上に袈裟を掛けたる今一人の客は、さればとよ、世に結婚といふもの無かりせば斯くまで戀は墮落せまじきに、折角美神が與えし靈化の妙智力は、人各々受るの機はありながら、下品の色情これを欺き殺すか、さなくも淺薄なる樂天主義とかいえる白痴漢が、あたら鍛錬の機會を俗殺して、あはたゞしく肉骸の結婚に手を握りて、戀成就せりとかラヴ圓滿なりとか稱して、得意に小成の安に睡る、戀必ずしも其目的夫婦にあらんや、ましてや區々のホームにあらんや、ホームは必竟社會組織の必要物に過ぎず、浮世は悉く社會の持物なりや、宇宙六合に瀰蔓する大慈大悲の此靈戀は、何ぞ局小たる社會の中に取籠み得んや、世は物質に呑まれたり人は形骸に溺れたり、徒らに榮枯に荒さみ小善に拘々し、世も人も小さく固結氷凝せるとの懸れなるや、靈界

に燦然たる一種の明道あり、男女能く此路を往きつべし、此道をゆく者始めて靈界の結婚を全ふし、能く獨棲を安ふして絕大の純美界に大夫婦を作る、此點を味はずんば、いかでペツレヘムの人の子が獨身獨居して至愛を說くを知らんやいかで印度ストダナ王の聖太子が獨身獨坐して大慈大悲を說くの意を解せんや、西上人、長明等を輕斷して、彼の信仰なき旅行者を觀るに恰も冬枯の林に瘦せ衰へたる樵夫の木を伐つが如しと言ふ人あるに至ては又言ふにしも足らず、ましてや鴨の羽がきに胸板を破り、池畔の蛙の水音に鼓膜を毀ちたる衷心の苦悶よと憐れみて、其聲は大失望、大絕望の反響なりといふ紫苑山人を悲しまざらんや、蓋し紫苑其人の誤ちにはあらず、實に今日クリスチヤンの、普通觀念を代表せしものにして、また憐れむにしも堪へたり、世を泡沫如露と觀じ戀を煩惱なりとして此世にはさまよひしとは言へども、彼れが內なる人は飄々として超脫し、別に宇宙大千の純美世界に皮肉肥滿たるヒユーマンと成りて棲住し、滿天之れ花を以て滿ち滿身これ雪を以て溢る、體內の雪花能く體外の雪花を知りて之れに絕美の調を發す、恍然として滿目の美に醉ひ、颺然として滿天の美に遊ふ、山家集一編蓋し此調凝て溜りたる一玉露に過ぎず…………

二客顧みて吾が窻下に佇むを知り、風雅の盜人さすがに憎くもあらざりけん、哄然として大に笑ひ復た言はず、筆を執り二人默して之れを書く

甲の客先つ筆を執りて　天地乾坤みな一呑や草の庵

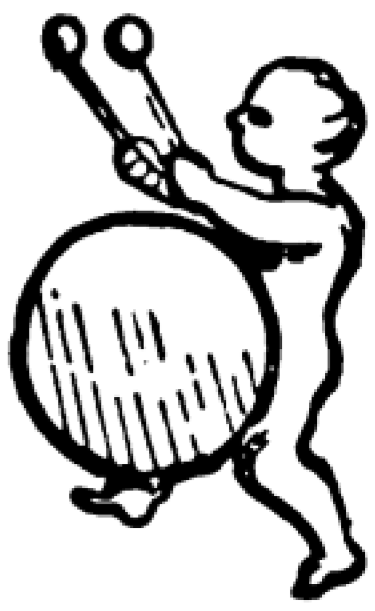
乙の客これに附けて　大千起滅す一塵の裡

甲客又之れに附けて　味ひ得たり澁茶一ぱい

甲客更らに筆を起して　利刄一閃浮世を斬て眞ッ二ッ

乙客直ちに應じて　活血流れよ未來萬年

轟然として投ぐるが如き一塊の靈風、万樹の梢に鯨波をあげて、耳塵一掃し去りたる後の一寸時、寂として庵中庵外の人思はず耳を世外に走らず。



井上大人の野邊おくりのかへるさによめる

殘花

一

棺の花は匂へども、夜の錦のかひもなや。
ゆきゝせはしき都路も、旗の文字さへおぼろにて、
わがこゝろより夕やみを、たどる思ひとなりにけり。

二

誰がいひそめし忍ばずと、忍が岡とけふぞしる。
日も暮るゝてふ里の名の、入合つぐる鐘の音に、
森をはなれし小鳥の、迷ひゆくこそあはれなれ。

三

迷はぬ君と思へども、情の緒のうちみだれ。
風にしさわぐ枯柳、そりしも空はかきくもり、
雲の衣手もれいづる、一ト村雨はらはらと。
おろかなりけり我心。天津御園に君はいま、
黄金の琴をかきならし、雪のまそでをふりはへて、
聖き使もろともに、神のめぐみを讚美ふらん。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

山庵雜記

透谷子

其一

夢見まほしやと思ふ時あやにくに夢の無き事あり、夢なかれと思ふ時うとましき夢のもつれ入ることあり。寤むる時亦た斯の如し、意はざらんと思ふに意ひ、意はんと思ふに意はず。去りとて意の如くならぬをば意の如くせまじと思ふにもあらず、靜に傾き盡きなんとする月を見れば、よろづ意の儘にならぬものぞなき、徐ろに咲き出らん花を待つに、よろづ心に任せぬものぞなき。如意却つて不如意。不如意却つて如意。悲しむも何かせむ。歡ぶも何かせむ。「無心」を傭ひ來つて、悲みをも、歡びをも、同じ意界に放ちやりてこそ、まことの　は來るなれ。

其二

早曉臥床を出で丶、心は寤寐の間に醒め、意ひは意無意の際にある時、一鳥の弄聲を聽けば、忽として我れ天涯に遊び忽として我塵界に落るの感あり。我に返りて後其聲を味へば凡常の野雀のみ、然るに我が得たる幽趣は地に就けるものならず。爰に於て私に思ふは、感應は我を主として他を主とせざるを

其三

人間の心中に大文章あり、筆を把り机に對する時に於てよりも、靜默冥坐する時に於て、燦爛たる光妙ある事多し。心中の文章より心外の文章を綴るは善し、心外の文章を以て心中の文章を裝はんとするは文字の賊なるべし。古へより卓犖不羈の士往々にして文章を事とするを喜ばず、文字の賊とならんより心中の文章に甘んじたればならむ。

其四

身心を放ちて冥然として天造に任ぜんか、身心を收めて凝然として寂定に歸せんか、或は猖狂或は枯寂、猖狂は猖狂の苦味あり、枯寂は枯寂の悲寥あり、魚躍り鳶舞ふを見れば聊か心を無心の境に驅ることを得、雨そぼち風吹きさそうにあひては忽ち現身の心に還る、自然は我を弄するに似て弄せざるを感得すれば虛も無く實もなし。

其五

世にありがたき至寶は涙なるべし。涙なくては情もなかるらむ。涙なくては誠もなかるらむ。狂ひに狂ひしバイロンには涙も細繩ほどの役にも立ざりしなるべけれど、世間おほか

たのものを繋ぎ止むるはこの寶なるべし。遠く行く情人の足を踏み止まらすもの、猛く勇む雄士の心を弱くするもの、情差ひ歡薄らぎたる間柄を緊め固ふするもの、涙の外には求めがたし。人世涙あるは原頭に水あるが如し。世間もし涙を神聖に守るの技に長けたる人を擧げて主宰とすることあらば、甚く悲しきことは跡を絶つに幾からんか。

其六

「麤く斫られたる石にも神の定めたる運あり。」とは沙翁の悟道なり。靜かに物象を觀ずれば物として定運なきにあらず。誰か恨むべき神を知りそめたる。誰か喞つべき佛を識りそめたる。心を物外に抽かんとするは未だし、物外物內何すれぞ悟達の別を畫かむ。運命に默從し、神意に一任して、始めて眞悟の域に達せんか。

其七

孤雲野鶴を見て別天地に逍遙するは詩人の至快なり。然れども苦海塵境を脫離して一身を挺出せんとするは人間の道にあらず。苦海塵境に清凉の氣を輸び入るゝにあらざれば詩人は一の天職を帶びざる放蕩漢にして終らんのみ。

其八

他を議せんとする時尤も多く己れの非を悟る。頃者激する所ありて生來甚だ好まざる駁擊の文を草す。草し終りて靜に內省するに、人を難ずるの筆は同じく己れを難ぜんとするに似たり。是非曲直輕しく判し難し。如かず修練鍛磨して叨りに他人の非を測らざることをつとむるに。

其九

大なる「悔改」は又た一個の大信仰なり。罪の罪たるを知らざるより大なる罪はなし、とはカーライルに聞くところなり。昨日の非を知りて明日の是を期するは信仰に入るの要緘にして、罪人の必らず自殺すべしとせざるは之をもてなり。罪の重荷は忘れざるによつて忘るゝを得べし、忘れたる重荷はいつまでも重荷なり。悔改の生涯は即ち信仰の生涯なるか。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

沖の嵐　　紫苑山人

(一)

けふもまた
朝日うらゝに　海原は
風なぎぬれば
あみとりあげて　その子らは
あみとりあげて　その子らは
舟うたたかく　櫂をしはやめ　漕ぎ出でにけり。

(二)

我が背子よ
我が父上よ　其の櫂の
其の櫂のど
はや歸へり來よ　ゆうべには
はや歸へり來よ　ゆうべには
まつの木かげの　ともしび見ゆる　我が宿さして。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

(三)

そもなにぞ
離れ小嶋か　くろくもか
さて黒雲か
あなたに見ゆる　そのかげは
あなたに見ゆる　そのかげは
さては嵐の　前徴なるかも　友よこゝろせよ。

(四)

たちまちに
百いかづちの　落つる音の
落つる音のど
あらしあらびて　海原は
あらしあらびて　海原は
あやめも分かず　常世の暗みと　なりにけるかな。

(五)

地の軸も
天のはしらも　碎けてし
碎けてしかな
生血に餓えし　荒神は

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

生血に　饑えし　荒神　は
黒きうしほの　ひまより牙を　むきいでにけり。

（六）

あみ—得—
魚を　放ちて　　其の魚の
　其の魚のごと
滅びの　あみを　くゝりてと
滅びの　あみを　くゝりてと
魚を　うらやむ　今はの果ての　海士の身悲しも。

（七）

もろともに
さけびあひにし　　其の聲も
　其の聲も早や
今はきこえず　なりにけり
今はきこえず　なりにけり
あはれ五百あまり　數多のともは　何地ゆきけん。

＊　＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊　＊　＊

（八）

夕　つく日
波間に　落ちし　をちかたに
　其のをち方に
父と背子との　かげもやと
父と背子との　かげもやと
まつの木かげに　立ちつゝ今日も　暮れにける哉。

（九）

あはれ／＼
ともしびきえて　此の里に
　此の里にたく
煙　も　今は　絶々　に
煙　も　今は　絶々　に
唯たいたづらに　心にかゝる　沖津　白波。

史傳

亞伯拉罕（其二）（アブラハム）

土井久壽彦

アブラハムがカルデアのウルを出でたるは其七十五歲に及べる時なりき、是より先き彼は果して如何にして過ぎ來りしや、史傳の以て徵すべき者なければ、殆んど之を知るに由なしと雖ども、然かも彼が此時に及びて、かの斷々乎として、自ら處せる所を見れば、彼はさくに唯一の神を認め、ひたすら神意に隨ひて其去就進退を決し、時に或は春花秋日自然の天眞に接し、感發默念し、時に或は四圍境遇の孰れも神を忘れて、其意に適ふを見、機もあらば己れ自ら別乾坤を拓きて、神意の行はるゝ鄕土を建てん者と一向に思ひ居たりしなるべし、

當時ウルの如き、ハランの如き孰れもハムの子孫蔓延し、開化の變も幾段か其歩を進め、製造貿易等も多少行はれ、建築の術も幾分か進めりと見ゆ、然れども人民一般に偶像禮拜の域に沈み、隨つて風紀大に弛廢し、人倫地に落ち、人々擧つて唯一の天父あることを忘れたり、アブラハムは此地を去りて遠くカナンの地に遷移したるなり

カナンの地たる、亞細亞、亞非利加、歐羅巴の三大州に挾まり、東はアラビの砂漠を控へ、西は茫滲たる地中海に臨み、レバノンの山其北を擁し、其南は進んで廣漠たる荒野に連り、內地は河川縈帶して其水を四方に配つが故に、漑灌自ら其の便を得、土地沃饒人々耕して以て支ふに足る、加ふるに當時は、住民至つて少なく、唯た村落の河畔に點在せるのみなれば猶ほ幾多の住民を容るべく、天然の固、正に以て別乾坤を拓くに恰好せり、

神は玆にアブラハムを召し、其全土を取りて、彼と彼の裔に與へ以て縱橫に其地を行き巡り其子孫をして、こゝに「地の塵沙の如く」に繁榮せしめたり、物換り星移り、上下茫々幾千年十九世紀の今日、全世界を統治する靈界の王は實に此中より出でたるなり、「天下の諸の宗族、汝によりて福祉を得ん」と言ふ者、寔に空しからず、

凡そ此世界に於ては、人間の言語よりも、人間の文字よりも、猶ほ一層高尙に、しかも隱微なる、言語の行はれ、文學の存在せることを知らざる可らず、自然世界に於て人と人と相交通せるが如くに、心靈の世界に於ても、亦た心と心と相交通せらるなり、人と人との因て以て相交通するは、言語と文字にかゝる所多しと雖ども、我の心と万人の心との交通に於ては、此の如き器械は到底無用なり、目を塞ぐも猶ほ視るべく、口を緘するも猶ほ言ふべく、耳を閉づるも猶ほ聽くべし、華を拈りて破顏微笑せる者是れ實に靈界の交通を示す一例なり、看よ「語らず、言はず、其聲聞ざるに其響は全地に遍く、其言葉は地の極に迄及ぶべきに非ずや、

アブラハムは學者に非ず、雄辨家に非ず、然ども彼が心靈の世界に於て如何に鋭敏に神の言葉を聞き、如何に雄辨に神と語りしやは、彼が一生を知る者の容易く知る所ならむ、吾れこゝに言を重ねんよりは、「神の友」なる一語を採り來りて、靜かに其奥意を味ふの勝れるに如かず、

人間の思想に於て何者か是れ「神我と一なり」てふ思想より廣大なる者あらむや、「我を遣はしゝ者我と共にあり、父は我を獨り遣き給はず、そは我恒に彼の心に適ふ事を行へばなり」と云ふ、如くに、天我相契合するは、是れ實に人間道念の究竟點なり、吾れ神に在りて勉むる者の早晚爰に達し得べき事をキリストに因りて信ず、然れども短かき人間の一生に於て、果して爰に達すべきや否や、吾れ之を知らず、知らずと雖ども、其期する所は、必ずや爰に於てせざる可らざることを知る、蓋し人間の人間たる品位は、己が身の遺化の經綸に相契合したる點にあることを思へばなり、人は謂ふ、自由意志と豫定の說甚だ解說するに難しと、吾れ此等に關して果して如何なる學說あるや、毫も之れを知らず、然れども看よ、地球は其自轉をなしながらも、猶ほ太陽の軌道を回轉せるに非ずや、自然界の法則何ぞ靈心界の法則と相異なるの理あらん、人間の自由意志、遺化の經綸と相契合してこそ始て人間は人間たるの自轉をなし、回轉をなす者には非らざるか、吾れアブラハムを以て完全圓滿なる人間と思惟する者に非ず、彼の道念を以て其究竟點に達したりと思惟する者に非ず、彼の一生に於ては隨分の過あるべし、後人の喙を入れて非難せるの點あるべし、然と雖も玆に其一生を槪括して之を通觀すれ

ば彼の一生は能く造化の經綸と相契合したるの一生にして、彼は自ら勉て己が身を將て、造化の經綸と相契合せしめんとなしたるの一生たるを知る、彼は選擇すべき危機に莅みては常に我見を拋て、唯だ單に神に自らを一任せり、鄕土を出でゝカナンに往き、ローと分れ、最後にイサクを捧ぐるに至る迄、如何に彼が己を棄てゝ神に依り、其攝理に一任し、其經綸に己を契合せしめたるかを看よ、蓋翁媼其鄕土を去るは是れ安樂の生活を離れて、苦難の生活に入りたるなり、ローと相分れたるは甘味を彼に與へて苦味を自から嘗めたるなり、イサクを捧げたるは、我よりも愛する我を捧げたるなり、かゝる者は皆な人情の難しとなし、忍ぶ能はずとなす所、而して彼之をなして、平然顧慮する所なし、嗟呼是れ慈愛の神を信ずる者に非ずんば、烏んぞ玆に至るを得んや、彼を以て「信仰の父」と云ふ者誠に宜なる哉、

アブラハムロトと分れ、其甥に與ふるに芳草萋々「エホバの園の如く」、五穀穰々「埃及の地の如き」ヨルダンの河畔を以てし、獨り自ら困難辛苦と戰ひながらカナンの地に住へり、蓋し彼が其鄕土を出でたるは、己が子孫によりて新國民を建設せんが爲なり、彼は此望に驅られてカナンの地に寄寓したるなり、然れども顧みて彼が身を察すれば如何、未だ一人の子女を有せず、彼も老ひ、其妻も老ひ、而してロトを除くの外は他に親戚の伴ふ者すら一人もなきに非ずや、若夫れ其望を將て甥ロトの上に懸るに非ずんば、彼が畢生の希望も空しく泡沫に歸せんとす、是を以てシケムに往き、モレに至り、エヂプトに遷り復たベテルとアイの間に遷り來るも、常に伴ふに其甥を以てし、其間實に親子も亦た啻ならざるの關係を有てり、然るに今やあへなくも、此關係を絕ちて「爾若し左にゆかば我右に往かん」と、東西其處を異にせざるを得ざるの不幸に遭ふ、何者か是れ彼か身に取りて「遺憾此よりも大なる者あらんや、沈吟默思彼此想ひ來れば、彼が胸中果して幾許の波瀾を捲きしか、座ろに想見するに堪へたり、素叕其宜に合はずんば、此時に及んで杳嗟天を仰ぎ、其是非に惑ふに至るは、蓋し人情の常なりとす、アブラハムは爰に至りて、果して如何になせしぞ、

神アブラハムに言ひけるは爾の目を擧て爾が居る所より西東南北を瞻望め、凡そ汝が觀る所の地は、我之を永く爾と爾の裔に與ふべし、我爾の後裔を地の塵沙の如くなさん、若し人地の塵を數ふることを得ば、爾の後裔も數つらるべし、爾起て縱橫に其地を行き巡るべし、我之を爾に與へん（創一三〇一四ー一七）

孤獨悄々人世の逆境に沈み、翁媼の前途も亦た日に迫る、然れども、彼か希望は猶ほ千萬年の後に懸れるなり、また以てアブラハムが性格の容易ならぬを見るべし、

人の一生は希望の一生なり、人類の運命は希望の運命なり、人希望なければ則ち死し、人類希望を失墜すれば則ち滅ぶ、希望は實に生命にして人を驅り、人類を動かすの動機なり、進步と云ひ、開化と云ふも、皆な是れ希望の行程を示せる表語たるに過ぎず、然れども「旣に希望を見ば復た希望なし」永遠に懸れるの希望にして、始めて眞に希望を捕へたる者と謂ふべし、アブラハムは未來を信ずるの念薄かりしならむ、然れども彼は旣に希望の中に其身を投入せり、彼自ら知らずと雖ども、彼は旣に永遠の中に入りたるなり、キリスト曰く爾曹の先祖アブラハムは我日を見んことを喜び、且つ之を見て樂めり、（約八〇五六）と、夫れ逆境は其を小になす者なり、彼アブラハムは此境に沈みながら、猶且つ洋々海の如き前途を認めて其眼光常に千萬年の後を射、怡々喜をなす、是れ實に己が身を將て造化の經綸を契合せしめ、此に因りて以て其行程を洞見する者に非ずんば、決して能くすること能はざるなり、宜なる哉、彼が其到る所に於て、先づ萬事を措て、第一着に執る所の事は、エホバに祭壇を築きて其名を龥ぶの一事なりしこと、夫れ祈禱とは己が身を將て、造化の大經綸に契合せしめんとする、胸臆神秘の大動機に非ずや、

偉人は常に偉人なり、決して場所と時との制限を受くる者に非ず、之を文に用ゆれば、立派なる平和の主となるべく、之を武に用ゆれば、秀逸なる戰陣の將となるべし、假令彼に於て秀づるも、此をなさしめば必ずや劣らん、假令此に於ては成功するも、彼に逢へば失敗すべしなどいふは、是れ實に偉人を限劃し、凡庸になしたる俗論者の盲と謂ふべし、若し之を疑ふ者あらば、請ふ「ゲダラチメル及び彼と偕なる王等」と戰ひたるアブラハムに就て之を觀よ、如何に彼か戰陣の將として、勇敢に高義に、寡慾に振舞ひしかよ、孔夫子曰はずや、「君子不器」と、此の如く彼は快くもゲダラオメルに打勝たり甥、ロトをば難なく其敵人の手より救ひ出せり、何者か是れ彼が前途の希望を遮る者あらんや、意氣揚々、山遷すべく、海塡むべし、然れども退きて獨り靜かに省みば、頗る慊に慊らざる者あり、曩昔の日其鄕を出でたる時は、甥ロトのあるありて、彼が希望の手始は、先づ之に懸りたれども、今や吳越其處を異にして、最早相合ふべくもあらず、親戚はあれども、何れも其鄕上に留りて與に謀るべき者なく、妻はあれどもイタク老ひたり、假令其希望は千萬年の後を射、其計畫は如何に善を盡し、美を盡し、加ふる

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

に沃饒なる地は其全土を開きて、彼を峡てるにせよ、思ひ想へば老境孤獨の身を以て、果して何事をかなし得らるべきや、彼が胸中愛に至りて悵然たらざる者なきか、

神アブラハムに臨て曰く、懼るゝ勿れ、我は爾の干櫓なり、汝の賚は甚た大なるべし、

アブラハム言けるは、主エホバよ、何を我に與へんとしたまふや、我は子なくして居れり、此ダマスコのエリエゼル我が家の相續人なり

（創、一五〇一―二）

見るべし、彼が胸の如何に迫り來りしかを、彼は實に其老僕ダマスコのエリエゼルを以て、彼の相續人となし、之によりて、其計畫に着手せんとしたりしなり、崇高偉大千万年の後を射る、彼が眼も、子なきの一事に至りては、實に窮迫したりしならむ、

エホバの言、彼に臨て曰く、此者は爾の嗣子となる可らず、汝の身より出づる者、爾の嗣子となるべし、と斯てエホバ彼を外に携へ出して言たまひけるは、汝の子孫は星の如くなるべし、

（創、一五〇四―一五）

彼は此に至りて、愈々窮迫せり、彼が其老僕を以て、相續人と、定めたるは、初より自ら好んでなしたる事に非ず、實に不得已る者、其間に存すればなり、而して此さへも亦た嗣子たる能はずとせば、抑も何者か彼が嗣子たる者ぞ、我も老ひ妻も亦た老ゆ、四邊を顧みるに與にすべき壯者一人もなし、天は正し、神は義ん、我自ら欺けるには非らざる乎、躊躇相拖して、實に神命に惑へり、女の性は時々樂園に惡樹の果實を眺めたるエバ教科を復習する者と見ゆ、左せんか、右せんか、一大疑惑の此時に及んで、狹隘なる人間の胸算を以て神の大經綸を限劃し、區々たる人智の模型に入れて、之を測らんと企てたる者は、是れ實にアブラハムに非ずして、其妻サライなりしなり、

アブラハムの妻サライ子女を生ざりき、彼に一人の侍女ありしが、エジプト人にして、其名をハガルと曰へり、サライ、アブラハムに言けるは視よ、エホバ我子を生むことを禁めたまひされば請ふ、我が侍女の所に入れ、我彼よりして子を得るあらん、

（創一六〇一―二）

と、人間は實に薄弱なる者あり、エバ誘に陷りたるアダムの孫は、時に又た其同轍を履む者と見

摘要

獨逸に於ける軍制幷に社會改良

獨逸國民の傾向如何を見るへき二種の議案は同國の議院と現れぬ、之に對する政黨間の議論紛々たり、其の議案とは何ぞ一は即ち軍制改革案にして帝國政府の提出する處たり、他は即ち稅法改正案にして普魯西より提出せるものなり。試に地圖を開きて獨逸の形勢如何を見れは其の危險なる一目にして知るべきなり、東には露西亞の陰險なるあり、西には佛蘭西の復讐せんと待ち構へたるあり、南には墺國匈牙利深く獨逸國內に侵入し居れば、是も又賴みとする能はざるなり斯く大國の間に挾まれたれば、古來此の國が歐州の戰場となりつゝありしも偶然にあらず、猶此の地形を知らば今日獨逸が軍制を改革せんとするの無理ならざるを見るべし。

今國會に提出せられたる改革案に依れば、常備軍四十六万八千人を五十七万三千人に増加し、本年度に於て一千六百万弗幷に向後年々一千四百万弗の増額を要求し、且つ兵役年期三年を二年に減縮せり、此の減縮は即ち政府か自由黨幷に急進派に讓りし處なるも其他は皆舊來のまゝにして、全國皆兵の主義より凡そ獨逸國に住する者は盡く兵役に服すべきとの議案なり。而して本案に關する議論は實に歐州全体の軍制に亘るものなれども、結局本案維持者の理由とする處は、現今のまゝにては吾が三國同盟を以て彼の二國同盟に對する能はず宜しく課稅を以て費用を徵集し軍隊を増加せざる可からずと云ふにあり、之が反對に立つものゝ理由とする處に曰く、獨逸軍人の氣風と訓練とを以てすれば、彼れ二國同盟の大軍に應ずるを得べし、且つや國民は此の上の課稅に堪ゆる能はざるなりと。十年前の軍制を以て今日の軍制を見るべからず、當時獨逸の陸軍は歐州に冠たりしも、爾來露西亞佛蘭西にて長足の進歩をなし、今は兩國共に獨逸に對して劣る所なきに至れり、當時一人の獨逸人は二人の外國人に敵するを得べしと信ぜし事

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

今は夢となれり、たとへ夢とならずとも、今日露佛の軍隊は增加して、獨逸人一人を以し彼等二人に敵するも猶及ばざるに至れり、今左に三國同盟と二國同盟との比較を擧げん。

	歩兵(大隊の數)	騎兵(仝上)	大砲(門數)
獨逸	五百三十八	三百七十二	四百三十四
墺匈	四百五十八	二百六十四	二百四十一
伊太利	三百四十六	百四十四	二百〇七
三國	千三百四十二	七百八十	八百八十二
佛國	五百八十四	三百六十四	四百八十
露國	九百六十三半	六百〇八	三百八十八
二國	千五百四十七半	九百七十二	八百六十八

此の表を以ても三國同盟の二國同盟に比し、軍隊の點に於て少く、兵器に於ては殆んど同じきを見る、更に各國の常備軍隊を比較せば二國同盟の三國同盟に勝る事益々明ならん。

獨逸	四十八万六千人	佛國	五十一万九千人
墺匈	二十九万九千人	露國	九十八万七千人
伊太利	二十三万人		
三國同盟	百〇一万五千人	二國同盟	百五十万六千人

兵數の比較右の如し、今三國同盟と二國同盟との間に一朝起らんか墺國と伊太利とは自國の防衛に全力を盡さゞるべからず、左らば獨逸は前に露國後に佛國、腹背敵を受けざるべからず、是れビスマーク公と雖も否む能はざるの事實なり、而して獨逸が徵集し得る兵員の最大多數は三百三十五万人なり之に對して露國は四百五十五万六千人、露國は四百十二万五千人を擧け得べし、爰に兩同盟の戰爭あらんに佛は其の半數を伊太利に向け露は又半數を墺國に向はしむるとなし、殘餘の半數を以て獨逸に向はしむとせよ、兩國の半數づゝは獨逸の全數に超過するなり、之れ現改革案が事あるに際し四百四十万の兵を擧げ得ん事を要求せし所以なり、殊に佛の勢の如き昔日の比にあらざる事カプリヴヰ伯の嘗て述べし處の如し。佛蘭西は人口三千八百万人にして前に擧げし如き多數の兵員を爲すを得、獨逸は四千九百万人にして豈に佛國が擧げ得る程の兵數を擧げ得ざるの理あらんや、只考ふべきの問題は經費にあるなり、獨逸自由派の新聞の言ふ處に依れば、千八百七十二年以來同國が費したる陸海軍の經費は二十七億五千万費なりと、之に對して佛國は戰爭の賠償金十億万弗の外陸軍のみにて同年間三十億万弗を費せり、斯くの如きの巨額は獨逸國民の決して支出を許さゞる處なるべし、然れどもモルトケ將軍が最後の言を國會に殘して曰く「只劒のみ能く劒をして鞘に納めしめ得るなり」と、實に各國同等の軍備なる上は戰爭は起らざるなり、孰れか劣らんか他は其の隙に乘じて起るなり、獨逸にて其巨額を支出せざるべからざるなり。

借て此の軍制改革に必要なる金額は年々千四百万弗なるが、此れは三種の課税を增加して支出するなり、即ちビールの税七百万弗ブランデーの税三百万弗株式取引所の税三百万弗を增加するなり、此の內尤も人民の好まざるものはビールの增税なれども、其の增税の爲め價の騰貴するは實に僅少なるものなるが上に、改革案は兵役の年期を二年となし、且つや之に依りて國民の安寧を得る事なれば國民の多數は喜んで此の增税を認承するならんと。之を要するに今回の改革は過去に於て執り來りし姑息の手段を棄て、非常なる大改革を爲し全歐洲をして恐服せしめんとに在り。

是より先き普魯亞なる社會改良論者は熱心に課税の不當なるを稱へ、あらゆる手段を盡して其の改良に從事せしが、如何にせんビスマーク翁固く執りて從はず、彼等は絕望して如何ともする能はず二十五年間其の不當なる稅法の內に呻吟せしが、爰に幸にして勞働に關する敕諭下り、勞働會議なるもの起り、ビスマーク翁の辭職となり、製造所條例出で、勞働者の養老保險となれり、斯て社會改良論者も再び力を得て、彼の税法を富者をして多く貧者をして少許の稅金を納めしむる樣せんと政府に向て歎願せり、殊に所得税財產稅に向つて斯の如く改正あらん事を望めり、ウヰリアム皇帝は終に普魯亞の財務官ヨハンネス、ミクエル氏を召し稅法の改正を委托し給へり、ミクエル氏は改良論者の一人なれば直ちに同論者の意見に從ひ改正を始めしが、其の結果先づ一年歲入二十五弗以下のものゝ稅金を免したれば、殆んど全勞働者の所得稅を免するを得たり、稅の割合は歲入の登るに從て增加し、若し一家族の四十四歲以下の小兒數多ある時は其の養育の爲め課稅を輕くするを得るなり、斯く種々なる便宜を與へしが其の全體の結果は次の如し、即ち今日でま千五百弗以下の歲入ありしものゝ總稅金は全所得稅金の五割九分

に當りしが、此の改正に依りて四割五分に減少し、同時に以前歳入七千五百弗以上の歳入ありしものゝ税金は、一割四分五厘なりしが二割六分五厘に増加せり。

爾今回の税法改正案は益々貧者の負擔を輕くして富者の負擔を重くせり、同案に依れば二十五弗以下の財産に税を課するを免じたり、是れ即ち勞働者寡婦等を保護せるなり、夫れより千五百弗以上七千五百弗以下の財産には五十錢の税課をなし、七千五百弗以上一万弗のものには、平均を以てせば五十錢の五倍二弗五十錢なれども、大に増加して三弗七十五錢とせり、斯くの如く改正案は寡婦孤兒其の他勞働に堪へざるものに對して保護する處頗る多く、之に反して別莊公園獵地等を有する富者には改めて國庫にも税金を納めしむる事とせり、投機商の如きもの土地を所有して其の目的に用ゆれば又重税を課せらるゝなり。此の改正案にして國會を通過するに至らば、普魯西は殆んど彼の温和社會黨が理想する如き幸福を得るなり。

左らば右兩議案に對する普魯西王國と獨逸帝國の議會の決議は如何、夫は未だ何人も知る能はざる處なれども、帝國議會に於ける軍制改革案は一つに天主教徒の代表の議員に依て左右せらるゝが如し、此の派は正しく百十票を有し、猶保守派幷「アンチセミチック」派合せて七十二票、之は波蘭黨及び國民自由黨の一部を加ふれば二百票を得べし、斯くの如くなれば即ち過半數を得るか如し、天主教派の議員は、シエヂユイト教派に對する法令を廢止すれは、容易に改革案に贊成せしめ得ければ、保守中正派國民自由黨急進黨等の反對あるに拘はらば、同案は二三の修正を經て通過するの事ありと云ふべし、普魯西議會の税法改正案の如きは必ず通過するを得べし、保守黨にて百二十票、國民自由黨にて八十五票、其の他天主教派幷に保守中正派等の贊成もあれば、同案は大多數を以て通過すへしとは確なるが如し。

批評

○武道秘訣合氣之術（武骨居士著）

左の評は　明治女學校武道教授星野愼之輔氏の筆に係る

武道の奥儀は意氣を養ふにあり、智と情とは武道教育の範圍に非ず、意氣とは意志と氣力の謂也、意志は必竟氣力の持物にして氣力は必竟意志の活力のみ、氣力にして若し修養するを得ずんば暴勇と成りて浮躁し、內虛にして沈靜せず外騷として輕擧す、意志あるも活氣なくんば之れ死灰のみ、活氣あるも意志なくんば之れ飛灰のみ、此二者を修養調和したるもの之れを膽力といふ。凡そ意氣健かならずんば萬の學藝智術漂盪として實を擧げ難く、靈界と物界に立て徹底の滋味を納め難し、此等の事は斯道を熱心學ぶの者に非ずんば談るにしも足らず、動中の大靜を味ひ、大寂中の動氣を味ふの者に非ずんば、之れを談るも狗子に眞珠を投るが如し、武道奥義の玄妙極致は固に不立文字なり、然るに今合氣之術一編を著す者あり、説くと頗る精緻ならずと雖ども、其文字に現はしたる勞苦經營の効は深く著者に感謝する所なり、武骨居士とは

如何なる隱士かを知らずと雖ども、深く吾が知人として記憶すべし、余輕燥淺軟なる士女の氣風に慨する者爰に久しく、偏に斯道の極致を傳へ難きに苦しむ、此一編實に吾が責務の一部を輕ふせる如く思へり、殊に泰西哲學も漸く讀心術の談起り來る由を唱へて、合氣の術尙ほ之れに優るものありと說き、掛聲は合氣術の武器なりと言ふに至ては愈々妙なり、而して此術の奥義は各自爾の胸中にありと結論して終に筆に述べ難き意味を示せり、固より然るべきとなり、書中全貫して贊稱するに堪えたりと雖ども、武道奥義に最も大切の關係ある禪家の道を非難の引例に擧げしは何ぞや、著者は居士號を稱すと雖ども、案ずるに禪を未だ深く考へざる人なるべし、之れ吾が著者の爲めに最も吝む所なり、著者知れりや、武道は之れ禪に因りて發達し來りしよを。要するに此書甚だ熟讀咀嚼するに價あり、好しや修道せざる者も一本を貯へて可なるべし。

○詩篇若葉（高瀨文淵作）　透　谷　子

近年文壇の宿將多くは天がくれして消息を絕ち、文界の光景何となく寂寥をして萬籟休するの思ひあり。讀書社會は異口同音に小說熱の冷却を語り、史論史談にあらずんば、以て冬夜を消するに足るなしとせり。此時機は自から文壇の新現象を喚起するに適するものにして、折節初陣を名乘り出るものあるも之を以てなるべし。

詩篇若葉も其一つなり。詩篇と題するの趣旨得て解し難し。附するに著者の文學見を以てするところを見ば、著者の抱負尋常ならぬところあるを知ると雖、さて何處に詩歌の着想と名くべきものあるや、何處に散文詩と稱すべき所ろあるや、若葉に於て余は之を見る能はず。小說中に詩趣の多きをもて詩篇と名くるを得るとせんか、此書の如きは詩趣の普通より少なきものなるべし。要するに初作としては花やかにして面白し。

○文祿の役に於ける小西行長

江藤新作氏が此の著、國民新聞去る十一日の附錄に於て完結せり。云く、

文祿の役に於て遠征軍の目的を誤まらざりし者は、實に行長一人ある耳、而して若し平壤に於ける行長の建築をして當時に行れしめば必ず一度び我日本の國旗を北京城に飜し得たるは疑なきと也。………。只だ行長が遠征軍

の歷史中に汚點を遺したりと云ふ可きものは、彼が沈惟敬の詐言に欺罔せられ、和議を媒介して豐公の烈怒に遭ひ、再び三國の兵禍を惹起したるとあるが、是は行長が封冊の古事を知らざりし不學の罪に歸す可きものなれ。清正が韓人を苦虐したるとは、彼等が清正を指して鬼上官と呼びたるに依りても之を證するに足らん歟。

○潛菴先生

「國會」二月十六日の紙上、末廣重恭氏が撰したる潛菴先生の小傳あり。先生は久我家の大夫、維新前后、京師に在りて潛かに畫策助力する所あり、王陽明學徒として最近尤とも秀でたるの人なり。此の小傳の文、よく之を寫す。

○大磯海水浴場の愚人

二月廿一日時事新報紙上、福澤翁が旅宿の主人に示したるの一文を見れば、老手のいよ／＼熟するに感服せざるものあらんや。市に大隱あり、商界に詩人ありとせば、此文の筆者は即はち其一なるべし。

時事

名士政談錄

帝國議會十五日間停會せられ、朝野を擧げて危疑の間にあるの時、「日本」は、民吏衝突に關する議者の意見を表出せんとて、諸々の名士の政談を錄したり。吾黨、坐がら之を讀むとを得たるを便とし、玆に多少注意すべく紀念すべき價値あるもの耳を抄出して一評を附すべし。何んとなれば、其政談は、一時の偶見にあらずして、皆能く諸士の人となりを表出するものあればなり。

大隈伯曰く、政治家が一國輿論の所在を認識して之を實行するに勇猛敢爲の氣魄を以てす、之を政治家が國家に對する眞心の發動と云ふ、と。

評に云く、實に是れ政治家の度量を得たり。隈伯屢ば此類の名言あり。而して彼は、官制大改革、經費大節減、地價修正、地租輕減を斷行するを以て、目今政治家眞心の指示する所なりと云ひ、敵伊藤伯には僂に之を斷行するの力ありと許しぬ。敵を重んじて而して之を苦しむ、一揚一抑實に妙を得たり。

安部井磐根翁曰く、衝突は可なり、國家の進運を助長する者なり、我國家は此衝突を經て始めて立憲政の實を見るに至る可し、此際政府に望む所は、決然冠を挂けて野に下るに在り。

評に曰く、翁の眞意は常に意外の所に係る、世論多く翁を誤認す、蓋し翁は啻に忠誠の人たるのみにあらず、其識見技倆亦大ひに見るべきものあらんとす。

犬養毅君曰く、和衷協同の道只だ一の解散ある耳、政府は如今何の黨派に向て降伏せんか、假令ひ予をして政府に在らしむるも雜然たる民黨の下に降る能はざる也。何さなれば降て而て倚る可なれば也、今ま斷乎さして解散せんか民黨固より多數を得ん殊に自由黨の如き一大政黨さならん以て議會に立ち獨立の運動を爲し得るに至らん、此に至て政府は徐ろに自由黨に降るべし、否な結托せざる可らざるの必要を見る、一度び多數を占めんか、言行はれ志成る、和衷協同求めずして至らん、否な衝突の道なき也。

評に曰く、犬養君毎ねに此類の妙案を出す、必ずしも其行ひ難きを咎むる勿れ、元と奇を求むるにあらずして淡然則ち此の奇策を出す、之れ君の君たる所なり。

白根專一君曰く、凡そ政略に硬軟の二種あり、之を啓鎖の寛嚴に譬へんか、硬略を取る者は其鎖すや嚴なりさ雖ども一旦之を開くや必らず人の意表に出るものあらん、之に反して軟略を取る者は其鎖すや寛なりさ雖ども其啓くや亦緩々たり、三大自由の如き其れ或は硬略政治家にあらずんば能く其門戸を開くとなけん、政界の操縱たる素より區々の道理に依て決す可らず、只だ感情の支配是のみ、予に一の政策あり、曰く、名譽大臣の位置を設け以て朝野百餘の政事家に冠せしむる也、馬車料を給せば即はち可なり、幸に戲言さ爲す勿れ、眞理此中に存せん。

評に云く、君到底一個の人物たり、斷乎として決行する所ろ太はだ多とすべし、而も往々卓識あり、世人槑りに之を斥ぞくる勿れ、前途尙ほ此人を大ひに要するの時機あらんとす。日本子曾て曰く、天下の横着物は白根專一と。其中の如き歩む所ろ、則はち君が最長所なる也。

尾崎行雄君曰く、藩閥其もの\最后は自害にあらず病氣にあらず衣なくして凍へ食なくして餓ゆるの類のみ、今日の事予をして薩長の爲に謀らしめば斷乎さして非常手段を取り威權を宇内に專らにし衆議を顧みず大事業を興して以て國民の信を取るにあり、區々たる輿論沙汰は薩長の爲に取らざる也。

評に云はく、君が十年一交木堂氏と親しきは此故なり。君等が策は敵をして驕らしむるにあり、開戰場に引出すにあり、而して一擊之を盡すにあり。野心勃々、膽力炎々、此點に於ては、院内能く及ぶもの尠かるべし。

佐々友房君曰く、二十年來積鬱の病は調和を以て治療し難く、須らく旗幟辨明正々堂々以て相對峙すべき也、吏たり民たり何んぞ之を論ぜん、蓋し人各々所見を異にし主義を一にせざるは當然の事なれば也、今日の憂は是にあらずして彼の曖昧不定にあり、正々を以て相衝突し堂々を以て相奪ふ、是れ予の最さも欲する所なり、予は常に敵の尤さも敵なるものを愛す、國家百年の長計は決して曖昧を以て論策し得べきにあらず。

評に云く、保守論者中第一流の士、院内未だ曾て辨論せずして而も自ら重きものあり、此回の論談實に君を表白して明らかなるとを得るなり。

○植民協會

我國の人口、我國の地形、我國海權の收攬、我國商權の伸張、我國人心發揚等に於て、植民政略を可さし、茲に、植民協會を設立せんさして、趣意書を世に發表したるもの見ゆ。植民の事、亦研究すべき大問題の一なり。かゝる協會の出來るは、祝すべきものさすべし。

○後藤昌直氏布哇行

フハーザー、ダミエンは、其傳道心をもて行き、我が後藤昌文翁の子は、其秀拔せる枝藝をもて、行かんさす。事、同じからずさ雖ども、熱へ、均しく喜こぶに足る。夫れ、我日本は、東洋諸國に對して、先導を派出するの氣慨常に無る可らず。

片々

浜海子 編

◎東京青年會　同會は去る十一日午後三時より集會を開き、此迄は別に定期に會員集會して運動の方法を議し、或は祈禱會を催す等のことなかりしが、已に會館建築も日々其工を進めたれば、今後は會員自動的運動を奬勵せん爲め、毎月第三土曜午後六時半より祈禱相談會等を催ほし、且其節は會員各自の演説等もある由、又今後は月報も成る可く廣く、日本青年會通信機關とし各地青年にも續々意見を載する樣にせん爲め大に改良する由なり、

◎東京夏期學校委員會　神戸關西學院菱沼平治氏には關西夏期學校委員を代表し、東京へ出張されたるを以て、去る五日午後三時半より、東京青年會館に於て相談會を開かれ、府下諸學校及び青年會同委員も出席し議事を開きたるが、同學校資金募集額を各地に割付ること、學校の設置の地は神戸にすべきか、將た須磨浦にすべきか、若し須磨浦とせば天幕を買入れて學校の財產としては如何等を議したる由、且今回は講演の時間を少くし可成各自の親睦或は運動會を盛んにせんとの計畫ある由、

（基督教新聞）

●三重縣通信

◎國民禁酒會　津市基督教會の牧師山岡邦三郎氏外數名の發起にて遲般國民禁酒會なるものを組織し目下會員募集中なり今その趣意は左に

國民禁酒會趣意

飲酒の人生を毒する他に比すべきのあるなし彼の一將功を成して万骨枯るゝとは戰爭の定相なり野に餓孚あり人相食むとは飢饉の常態なり然りと雖ども之れを飲酒の害に比せば其禍少なる矣、蓋し戰爭飢饉の如きは稀にある所のものなれども飲酒の害に至りては貧富貴賤の別なく日夜襲ひ來りて幾數万の良民を虜にし無學貧困疾病罪惡の毒を流し傷身敗家亡國の泉源となり又救濟の途なきに至るべし見よ我幽民の此の毒水に沈溺し罪惡疾苦悲哀滅亡の波を起し無上の樂園を變して血淚の幽谷となし富貴の田園を變して貧賤の泥沼となさしむるを又見よ凍餒に號ふ貧兒を顧みることなく玉殿に醇酒を酌むものあり五日に家財を賣り十日に兒女を賣り以て酒貲に充つるものあるを彼等は毫も身を思ひ家を思ひ又國を思ふの心なきものなり豈に慨歎に堪へざらんや實に國家に對するの責任を思ふもの誰か之を見て袖手傍觀する忍びんや吾人之を憂ふる事久矣茲に同志相會し即ち本會を設け各自互に相助け飲酒を禁ずるの實を擧げん尙ほ廣く此の主義を世上に擴張し以て此害惡の泉源を枯らし國家の安全と同胞の幸福を增進せんとす冀くは世上同感の兄姉速かに之に贊同し我國民たるの大義を盡されん事を

●福島縣通信

◎若松の幼年會　同會員は、豫て書籍館設立の計畫ありたるが、今般創立せらるゝこととなりぬ、同趣意書は左の如し、

世ノ義心ニ訴フ

我幼年會生レテ日尙ホ淺シト雖モ、幸ニシテ、先覺者ノ奬勵ト、講師ノ薰陶トニ依リ、漸ク生長スルヲ得タルハ、吾等會員ガ、滿腔ノ感謝ヲ表スル處ニシテ、今ヤ（受クルヨリモ與フルハ福ナリ）テフ、千古ノ訓言ヲ實踐スルノ必用ヲ悟リ、特リ退キテ敎ヲ受クルノミナラズ、更ニ進ンデ、自ラ働キ世益ヲ計ラザルベカラザルヲ感ジ、其第一着步トシテ、基督敎ノ傳播ヲ贊助シ、且ツ新智識ヲ普及セシムルノ目的ヲ以テ、若松書籍館ナルモノヲ設置セントス、幸ニシテ、本會ノ贊成員タル中村紅道其他諸氏ノ主唱ニ依リテ成リタル、若松基督敎會附屬ノ書籍室ト合同スルノ榮ヲ得タルハ、欣喜ニ堪ヘザル處ナリトス、

抑モ文運旺盛ノ今日、古書新著ノ棹ニ止ホルモノ、啻ニ汗牛充棟ノミナランヤ、然ルニ限リアルノ資力ヲ以テ、限リナキノ著書ヲ設備センコトハ、到底爲ス能ハザルノ事ナリ是レ歐米諸國ガ通邑大都ヨリ、僻村小市ニ至ル迄、悉ク書籍館ヲ設置シ、以テ衆庶ノ縱覽ニ供スル所以ニシテ、我幼年會ノ希圖モ亦之ニ外ナラズ、サレバ、特ニ志士仁人ノ贊助ヲ仰ギ、漸ヲ追フテ、會津地方ノ一大書籍館タラシメ、此地方ニ普ク文化ノ余澤ヲ蒙ラシメンコヲ期ス、是レ吾等幼年ノ働トシテ最モ有益ナルモノト信ズル處ナリ、仰ギ冀クハ、世ノ此地方ヲ思フノ士、吾等幼年ノ微衷ヲ諒シテ、金ノ多少ト書ノ大小トニ關セズ、奮テ喜捨シ、吾等幼年爲スナキモノヽ、唯一ノ望ヲ充タシメラレンコヲ護ンデ訴フ、

明治廿六年二月　日

若松基督敎徒幼年會附屬
若松書籍館設立委員

名越士郎
西川幾次
井澤一
田中壽千代

贊成員　內田政雄君　下曾根信守君　早野竹藏君　照井正六君
中村紅道君　佐藤政吉君　宮崎喜藏君　木下二郎君　秋山淸八君

●橫濱賀通信

◎東京禁酒會橫須賀部會　同會は仁科喜代松、貞方進之兩氏發起、本月十九日事務所ニ於テ役員撰擧ヲ行ヒシニ、其結果トシテ、部會長仁科喜代松理事兼會計委員、貞方進、通信書記川端作次郎、奬勵委員、祖母井駒太郎仝、船越藤造、婦人奬勵委員、山田ツネ子之諸氏當撰したる由、

史海

第二十卷 目次

◎藤原基經……田口卯吉君

藤原基經の歴史は我邦憲法上の一大問題を存せり、此篇專ら意を茲に注くものあり

◎ベンジャミン、ジスレリー……矢部新作君

ジスレリーは二流の頭腦を以て一流の政事家と爲りしものなり、故に其一生に波瀾多し、此篇彼れが行徑を叙し、性情を示し又其政策を評せり、共に相待つてビーコンスフィールドの本色を見るに足る

◎マリー、アントアネット后……渡邊修二郎君

小恩却て流言を招き、一雙の「ダイヤモンド」爲に奇禍を買ひ、遂に國王と共に革命に殉す、佛國宮中の秘事、廷臣の敗德、瞭々其實を措く、之を今日に撰ぶ、記者微意のある處

◎天孫以前の原人……三溪居士

三溪居士の「天孫以前の原人」は我か國上古の住民に四種あることを論じ、土蜘蛛人種の東京近傍に子孫を遺せること、熊襲即ち隼人人種の九州に蔓延して、怡土國を建てしこと、又該人種は朝鮮より來らずして、南洋より來りし事を考證したり

◎コロボックルの圖……二面

批評欄內益々騷然たり

定價 一冊金九錢。十冊前金七十五錢。市外は一冊に付郵稅二錢增◉每月一回發兌

發行所 東京京橋國彌左衞門町 經濟雜誌社

大取次 東京。東京堂、巖々堂、東海堂●大坂、岡島新聞舖●京都。便利堂

同志社文學

明治二十六年二月二十日第六十二號

目次

同志社文學

傳道と吾人の責任……小崎弘道

論說

蠶糸代用品に就て（未完）……ドクトル、オヴ、フヰロソフヰー 市原盛宏

京鶴鐵道を論す……六無散人

英語教授に就ての希望……マスター、オヴ、アーツ 田村初太郎

日本人種の弱點（未完）……南風子

經濟上に於ける女子の勢力……ドクトル、オヴ、フヰロソフヰー 小野英二郎

講談

黴菌學の現況（未完）……ドクトル、オヴ、メヂシン 兒玉信嘉

雜錄

同志社文學に寄す（巖谷漣）懷舊鎖談（素軒學人）文學は美術かはた職業か（雲峰生）何ぞ然かく騷然たる（靜軒逸人）宗敎社會の新現象（靜軒逸人）英國勅撰詩人の候補者（雲峰生）山本覺馬翁の逸事

批評

德川十五代史第一、二、三、四編（魔々子）和文學史（魔々子）新撰日本外史第一、二、三篇（靜軒逸人）日本歴史評林第一編（靜軒逸人）雜誌文學（雲峯生）

文藻

詩七首（農學校教授……大島正健）詩二首（坂本義夫）島千鳥「國詩」（松籟山人）新島氏記念會の讃美（失名子）

本號には舊會津藩の傑士后に京都府會議長たりし**山本覺馬翁の肖像**を掲けたり、鮮明美麗有名なる同翁の相貌定然想察す可なり。

京都同志社 **同志社文學社**

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

福音新報

毎金曜日發行

第百二號（二月廿四日發行）目次

◎福音新報
思ふまゝ（上）
罪惡とは何ぞや（三）
四人の我
◎教報
神學研究會に於ける博士ノックス氏の講演○救療會○芝教會連夜説教會○赤坂靈南坂教會○上野ミッション○大坂、高知、名古屋、松山、神戸各地方通信
◎外事
猶太人續々歸國す
◎史傳
軍人的宗教家イグナシアス、ロヨラ（二）　廿六無
◎雜錄
講壇小言（京童子）○靈魂の歌（殘花道人）
◎家庭
盲女と聖書
◎小説
松の翠（第十回の上）　鹿嶋渚
◎説苑
邪教大意　西森雪山
來世的宗教　筑北生
◎著書新聞雜誌
基督教新聞○護教○六合雜誌○潔行集第二

定價　一部二錢五厘○十三部（三ヶ月分）卅一錢五厘○廿六部（半ヶ年分）六十錢○五十二部（一ヶ年分）一圓十四錢○府外は一部に付郵税五厘を要す

發行所　東京麹町三番町卅五番地　福音新報社

東京府下留學の青年に好き寄宿所尠きを憂ひ矯風上の精神を以て家族主義に據り造れる**青年寄宿ホーム**なるものあり小生が知人の設くる所にして深く同感同情を表するものたり、設立以來既に數年を經たり。目下**欠員二人**ある由に付入舍望の人、及び之を所望する父兄あらんかとて茲に廣告す、望の人は書面にて御申越、其所學及び事情は記して御問合せあらんことを要む、

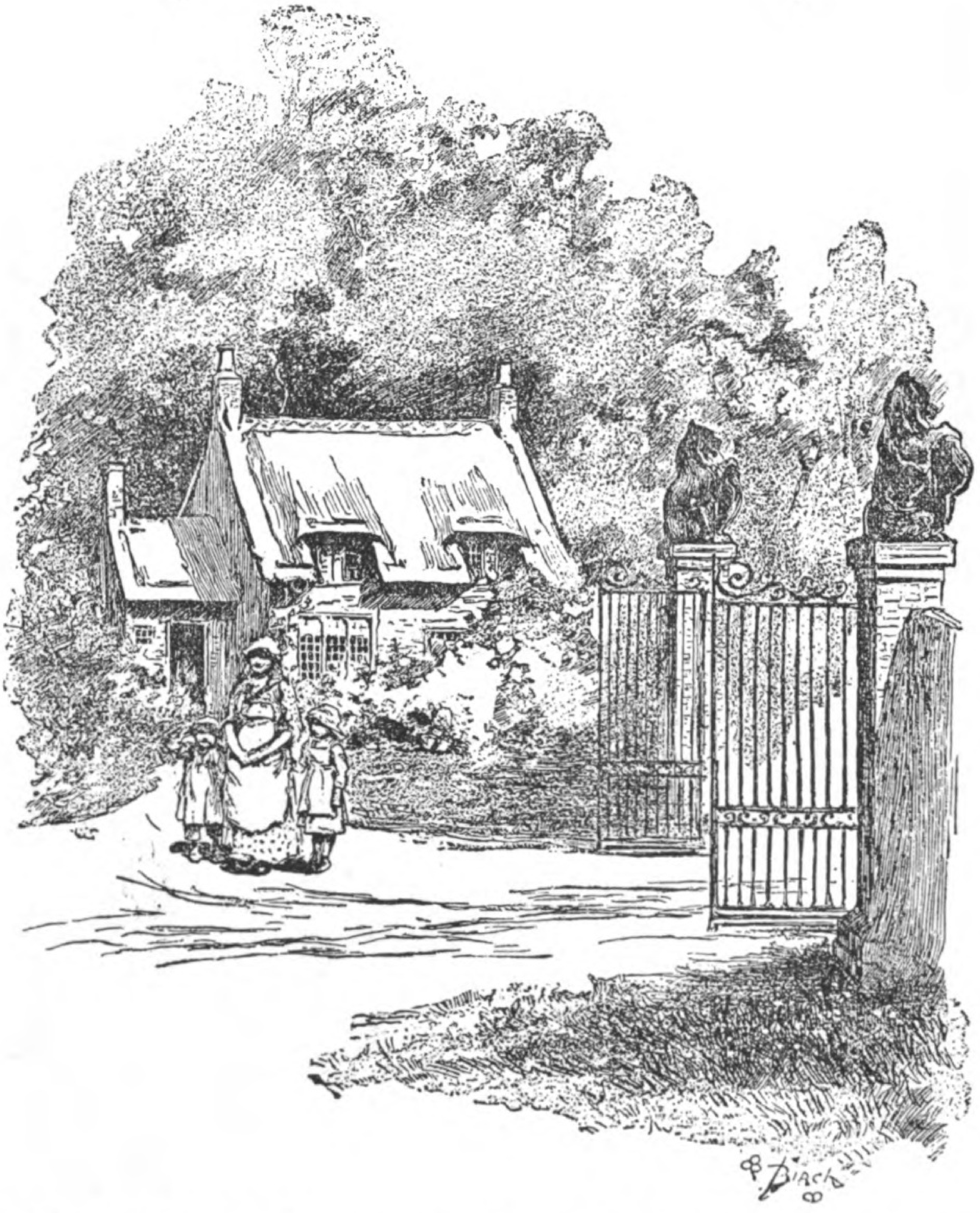
社內　岩本善治

(クツトル○ロールド○フホントルロイ)

小公子

若松しづ子譯

小供のよみ本



小公子第五回のさし繪

原著は近頃

英米に轟き渡り子供の讀物として愛々しきと潔き類ひ更にも言ず、之を讀ろ間は天使に接するが如し、改版十數回且尙ほ劇に演じて非常の喝采を增しぬ、

正價金廿八錢

發行所 女學雜誌社

賣捌店

○東京。瑞穗屋、丸善、小林、東海堂、巖々堂、春陽堂、中西屋、布美乃屋、重陽堂、誠之堂、○橫濱丸善○京都。東枝律、大黑屋、○大坂福音舍、岡島、梅原○神戶。福音社○熊本。草野○函館。福音舍

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

文學界

第二號要目　來ル廿八日發兌

茶道の祖、利休居士（十頁完結）　天知

悲曲　琵琶法師（四齣出始め）　古藤庵

人世に渉るとは何ぞや（八頁長論文）　透谷

筆のすさび（思ひ出し事聽き得し事）　花圃女史

馬上人世を思ふ　無聲旅士

（附錄）女歌仙家集講義　大和田建樹

此他兼好家集を附錄とし、彙報に當今文學の記實あり、新刊雜誌の批評、紹介あり

見る人は見よ、見ざる人に强いては賴まず、知る人を待つこと熱望に堪えず。

著作白尾谷君著

白峰むら

全一冊

定價金貳拾錢　全國無遞送料　郵券代用不苦

此書ハ古今未曾有ノ良小說一本ヲ購フテ其眞味ヲ知レ

發行所　東京本鄕區元富士町二番地　盛春堂

一書籍代金二十錢未滿は郵券代用不苦候、郵券は五厘切手一割增に限る
一雜誌及び書籍代金迅速便にて御送付の向は屆け實さも淸にして御送付相成度候

女學雜誌代價

○白赤双方合せ購讀の分

十冊	前金	五十八錢	府外	六拾三錢
廿六冊（半年）	同	一圓四十三錢	同	一圓五十六錢
五十二冊（一年）	同	二圓六十錢	同	二圓八十六錢

○白赤の內一方購讀の分

六冊	前金	三十五錢	府外	三十八錢
十三冊（半年）	同	七十三錢	同	七十八錢
廿六冊（一年）	同	一圓三十錢	同	一圓四十三錢
一冊	金六錢	郵稅	金五厘	

廣告料及無料廣告

一行	一回	（廿七字詰）	前金　拾錢
同	三回以上		一割引
同	六回以上		二割引

○十行以上一割引。　二十行以上二割引。
○四十行同四割引。
但し不道德なる廣告は謝絕す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭くるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部注文を要し以上半頁每に十部增と定む。

發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三